

日本におけるシュライエルマツハー研究
の七〇年（一九一四—一九八四）

高 森 昭

- 目次
- 一 始めに
 - 二 戦前における諸業績を省みて
 - 三 戦時下の「信仰論」研究——とくに石井次郎「シュライエルマツヘル研究」（一九四八年）を中心に——
 - 四 戦後のシュライエルマツハー研究の歩み
 - 五 回顧と展望
- 注および付属資料

一 始めに

ここにまとめられた小論は、フリードリッヒ・シュライエルマッハー Friedrich Schleiermacher (一七六八—一八三四年)の研究が、我が国において進められてきた経過を述べたものである。その際に一九一四年を起点としたのは、この年すなわち大正三年一月に、石原謙氏による「シュライエルマッヘル宗教論」が刊行され、日本におけるシュライエルマッハー研究の先駆的な業績となっているからである。また一九八四年三月には、シュライエルマッハーの死後一五〇年を記念して、国際学会 Internationaler Schleiermacherskongress が、西ベルリンにおいて開催されている。筆者自身さいわいにも、この第一回国際シュライエルマッハー学会に出席して、日本におけるシュライエルマッハー研究の事例を報告する機会を与えられた。我が国におけるシュライエルマッハー研究の過去と現在が、かくして国際的な連携・交流のもとに周知の状況となったのは、研究史のうえでおそらく画記的な出来事であろう。もちろん日本におけるシュライエルマッハー研究の流れが、回顧されまとめられた例は、これまでもあったのである。¹⁾しかし、石原訳の宗教論が出版された一九一四年より数えて、奇しくも七〇年をへた今日、あらためて国際シュライエルマッハー学会という機会をとらえて、日本における研究史をふりかえりつつ同時に今後の課題を見出すことは、意味のある仕事であると思われる。

そこで先ず最初に我々は、主として戦前における諸業績を回顧するところから出発したいと思う。

二 戦前における諸業績を省みて

我々はこので石原謙氏による、宗教論の翻訳と研究から始めたい。その「シュライエルマッヘル宗教論」は、大正三年(一九一四年)に内田老鶴圃より出版されたが、それ以前に日本においてシュライエルマッハーと取り組んだ業績が、皆無であったとは云えない。例えば高倉徳太郎、「シュライエルマッヘルの『宗教論』」(一九一〇年)があることも忘れてはならない。²⁾しかしながら、日本におけるシュライエルマッハー研究の出发点として記憶すべき業績としては、我々は石原謙氏の「シュライエルマッヘル宗教論」をあげなければならぬのである。本書は本文に宗教論初版の翻訳を収めているが、それと共に、序説として、「シュライエルマッヘル詳伝及び其の『宗教論』内容解説」がつけられている。いずれも手堅い、堂々たる叙述であつて、その内容は当時としては研究論文として通用するものであつた。この書が大きな反響を呼び、大正八年(一九一九年)に第二版が、さらに大正一一年(一九二二年)に改訂第三版が出されているのも故なしとしない。³⁾このように我国においてシュライエルマッハーの宗教論が翻訳されたのは、弁証法神学以前の時期であつたことは注目に値する。さらに石原訳の宗教論が、我国においてドイツの神学や宗教哲学に対する研究が殆ど為されなかつた時に、本格的に宗教論の原文と取り組みつつ、一貫した解釈をなし得ていることは評価されて然るべきであろう。⁴⁾なお石原氏はそののち一九二九年に、「プロテスタント主義神学者シュライエルマッヘル」と題する叙述を発表されたことも、この機会に付け加えておきたい。⁵⁾

石原訳の宗教論が取り上げられたのに関連して、我々はこので我国における宗教論の翻訳が、さらにその後も四種ほど出版されている事実にふれなければならない。すなわち時期としては戦前から戦後にわたっているが、宗教論の

翻訳は、石原訳を含めると五種に及ぶのである。石原謙訳（一九一四年）に引き続き、河面仙四郎訳（一九二九年）、豊川昇訳（一九四八年）、仁戸田六三郎訳（一九四八年）、佐野勝也、石井次郎訳（一九四九年）が行われて今日に至っている。このように多くの翻訳が我国において試みられてきたことは、シュライエルマツハー研究史のうえで注目されてよい事実と云って差支えない。それと共に一九一四年に出版された石原訳は、他の翻訳に決定的な影響を与えたことを、我々は忘れてはならないのである。

宗教論の翻訳が多く試みられてきた事実と対応して、シュライエルマツハーの初期著作のひとつであり文学的な香りをたたえている、「モノローゲン」独語録の訳もまた、五種を数えることに言及しなければならぬのである。最初の訳は、木場了本氏による「シュライエルマツヒャー独語録」と題して、一九一五年に出版されている。さらに陶山務訳（一九三四年、のち一九三九年、一九四九年の二度にわたり改訳）、木場深定訳（一九四三年、上記木場了本氏のもの改訳、のち一九八〇年改訳）、成瀬無極訳（一九四九年）、秋山英夫訳（一九六二年）がなされている。これらの翻訳が宗教哲学のみならず、ドイツ文学専攻の研究者によっても行われているのは、我国におけるシュライエルマツハーへの関心が、哲学および文学の領域において先ず芽生え維持されてきたことを示しており、興味ぶかいものがある。

さて日本におけるシュライエルマツハー研究の歴史を考えるにあたって、忘れてはならないのが教育学における業績である。シュライエルマツハーが近代教育学の進展にのこした影響については、すでに古くから知られてきたことであり、我国の研究者が早くから関心をいだいたのは当然であろう。この関連で記憶されてよいのは、大瀬甚太郎「シュライエルマツヘル氏教育学」（一九〇〇年）である。石原訳の宗教論に先立って、教育学においてこの業績がこの

されていることは注目してよいと思われる。さらに戦前についての教育学関係の業績を、筆者が限られた範囲で見出した限りでも、幾つかのものがあげられる。すなわち、山極真衛「シュライエルマツヘルの教育学」（一九二八年）、および篠原助市「シュライエルマツヘル」（大教育家文庫18）（一九三九年）を言及せねばならない。また一九二七年に創刊された「教育思潮研究」にも、シュライエルマツハーの教育学説を論じた文章が見出されることは興味ぶかいものがある。恐らくこれらは代表的な例としてあげ得る幾つかの業績と云うべきであり、戦前における仕事のすべてを、もれなくそこで表わしていることは申すまでもない。足らざる点に関しては、さらに御教示を願ってやまない。

教育学とともに日本におけるシュライエルマツハー研究が、戦前にのこした業績としては、哲学とくに宗教哲学の領域に関するものがある。最初に言及されるべきは、渡辺泰三「シュライエルマツヘル」（西哲叢書19）（一九三八年）であろう。本書は一九三九年に第二版、さらに戦後一九四八年に第三版を出しており、我国においてシュライエルマツハーの思想が、哲学関係の研究者に知られて行った経過を伺わしめるものがある。しかしながら我々がここで逸してはならない業績は、中村明「シュライアマツハーに於ける『高次的実在論』」（『哲学及び宗教と其歴史―波多野精一先生献呈論文集―』、岩波書店、一九三八年に収録）である。同氏はここでシュライエルマツハーの宗教思想がもつ特色を示す中心概念として、高次的実在論を提唱している。波多野精一氏による刺戟のもとに、この洞察がなされていると考えられるが、しかしその着眼点の深さは今日あらためて評価されて然るべきものがある。戦前におけるシュライエルマツハー研究業績のなかで、記憶されるべき内容であろうと思うのである。

我々は更にここで、神学の領域における業績について触れなければならない。戦前の時期を省みる場合に、先ず言及されて然るべきは、佐野勝也氏ではないかと思われる。同氏はその「宗教学概論」（一九二三年）において、シュ

ライエルマツハーの言及を行っていることが示されている。¹³ また石井次郎氏との共訳によって、「シュライエルマツ宗教論」(岩波文庫)(一九四九年)が出されているのも、この関連で記憶されて然るべきであろう。加えて佐野氏とならんで戦前の業績として、ここで言及しておかねばならないのが、大島豊「シュライエルマツハーの信仰論」(一九三四年)である。¹⁴ 本書は米国のイエール大学に提出された学位論文をもとにしたものであり、この意味で注目されてよい成果であったと云える。また同氏によつて、シュライエルマツハーの書簡を中心に翻訳され編集された、「シュライエルマツヘル」(大思想家選集4)(一九四〇年)が出されているのも、併せて記憶されてよいことである。¹⁵

三 戦時下の「信仰論」研究

——とくに石井次郎「シュライエルマツヘル研究」(一九四八年)を中心——

次に我々は神学の領域において、シュライエルマツハーの主著である信仰論にとりくみ、翻訳および研究が行われた、主として戦時中の業績に触れてみたい。この場合に言及されねばならないのは、三枝義夫氏の「シュライエルマツヘル信仰論序説」(一九四一年)と、石井次郎氏による「シュライエルマツヘル研究——生涯と思想——」(一九四八年)である。¹⁶ とくに後者は、その第二部において、信仰論を中心にシュライエルマツハーの神学思想をまとめたものである。出版は戦後の一九四八年であるが、実質的には第二次大戦中になされた業績であり、我が国のシュライエルマツハー研究において、本書の持つ意義は少なからぬものがある。それ故ここでは主として、石井氏の著作について述べることにしたいと考える。

始めに言及した三枝氏のもの、信仰論第二版の序説のみを全訳し、さらにシュライエルマツハーの生涯と著作についての紹介とともに、信仰論の概要を解説した文章を付した内容となっている。序説の部分のみとはいえ、省略なしの翻訳に我々が接し得るのは、今日もなおこの書物によつてであり、この意味で貴重な存在と云わねばならない。

石井次郎氏の「シュライエルマツヘル研究」について、こんにち我々が見落してはならぬことは、本書がいちど原稿が完成したものの出版の機会を失い、¹⁷ そのかなりの部分が第二次大戦のために外国からの研究の情報がとどえた中で、更に手を加えられている点である。著者が戦前の、二〇年代、三〇年代のドイツにおけるシュライエルマツハー研究の代表的な文献を利用しつつ、論述を展開しているのは、そうした事情のためである。しかしながら本書は、今日に至るまでシュライエルマツハーの神学を論じた、我が国における唯一の単行本としての位置を保っている。したがつてこの点に、日本のシュライエルマツハー研究史における、本書の記憶すべき貢献があると云わねばならぬであろう。それゆえ以下に、内容の概略を紹介して見たい。

まず第一部では、シュライエルマツハーの生涯が、伝記のかたちで叙述されている。¹⁸ 著者が当時なお利用することの出来た、著名な幾つかの伝記によつて、それがまとめられたことが、本書のあとがきにおいて明らかにされている。すなわちW・デイルタイ(一九二二年第二版)、H・ムラート(一九一八年)、O・ブラウン(一九二八年第二版)による伝記である。¹⁹ 同時にまた著者はこの第一部においては、シュライエルマツハーが手紙や説教に示すような、人間理解や信仰心の展開を跡づけ得なかったことに遺憾の意を表明している。

つづく第二部においては、シュライエルマツハーの思想が取り扱われ、問題と方法、宗教の本質、神、人、イエス・キリスト、神学の方法と題された、六章にわたる論述が展開されている。²⁰ 我々はここで当時のシュライエルマツハー

一研究において、大きな論争点となっていた神学的対決にふれ、それが直接、間接に本書の論述に示されることに注目しなければならぬのである。一九二〇年代に弁証法神学がおこり、K・バルトやE・ブルンナーによってシュライエルマッハーへの批判が激しく展開されるに至った状況や、また弁証法神学者の間に表われてきた、微妙なシュライエルマッハー解釈の相違は、ただちに著者の論述に反映されており、研究史のうえから興味ぶかいものがある。

著者が本書において示す立場は、シュライエルマッハーの宗教および神学を理解するに際して、宗教論よりもむしろ信仰論を第一資料とすべきであるとするものである。²¹ブルンナーのシュライエルマッハー批判の書「神秘主義と言」においても、この点はむしろ不徹底であり、宗教論を第一資料としていることが指摘されている。この点では著者は、G・ウォッバーミンの立場に賛成するのである。²²したがって石井氏は、シュライエルマッハー神学を、信仰論第二版に表われた晩年の円熟した視点から、把握すべきであると考えているのである。

しかしながら著者は、シュライエルマッハー神学の前提となる、宗教の理解に関しては、弁証法神学者、とりわけブルンナーの批判に対して、正面から対立する考え方を示している。²³ブルンナーがシュライエルマッハーの絶対依存感情を、主観主義・体験宗教として非難し、範疇的に主観主義に対立する客観主義を主張することを、著者は明確に拒否し批判をしている。そこには単に信仰の主観化という批判から事柄を決するのではなく、シュライエルマッハー自身に即した正しい理解を展開せんとする意図が示される。石井氏はシュライエルマッハーにおいては、宗教体験における「勝れて他者的な性格」と、「所与となり得ない絶対者」との契機が、無視されてはならぬことを主張する。²⁴換言すれば、絶対依存感情とは、客観化し得ない対象であり、客体として把握し得ない絶対者に、完全に依存することに外ならないのである。

シュライエルマッハーの神論について、石井氏は人が神の前に傍観者としてではなく、当事者として立つ限り、我々が現実には神と出会うその場所において、神は語られることを指摘する。その際に信仰論第二版パラグラフ六四の二にある、「すべて神についての表現は、神に向っていることを前提とする」²⁵が引用される。換言すれば、神論とは、神によって規定され生起した、信仰の事実を記述したものに外ならないのである。

さらに著者はシュライエルマッハーの人間理解を取り上げて、その罪過論に言及している。シュライエルマッハーの場合、霊の働きを阻む積極的反抗としての罪過は、つねに一貫して恩恵によって克服された契機として把握されていたことが指摘される。石井氏は信仰論第二版パラグラフ六六を中心に検討した結果、シュライエルマッハーが宗教改革者の遺産を純粹に継承した面をもつと共に、罪を意識の事実と見なす時代の制約を越え得なかったという結論に到達している。²⁶

シュライエルマッハーが、歴史的な人格であり同時に創造的力をもつ原型としてのキリスト論を述べたことは、広く知られている。著者はこれを解釈して、原型は救われた人間の新しい存在が、それにより可能となる根拠と云うべきであるとしている。²⁷また石井氏は信仰論第二版パラグラフ九三および一〇〇の分析をもとに、ブルンナーからの神秘主義への脱落とする批判を、独断にもとづきものとして退けている。

神学の方法を論じた最終章において、著者は改めてシュライエルマッハーの位置づけを試みている。かつてアウグスティヌスによって開かれた、神学を啓示の事実²⁸に即せしめる試みを、新しく学問方法として自覚しつつ、啓示の事態性に徹せしめた点に、その貢献を見るのである。この観点からバルトのシュライエルマッハー批判は、両者が意図する神学の形成が基本的には重なり合うことを自ら示したものと、石井氏は理解するのである。

本書のあとがきにおいて、今いちど著者は自身の課題に触れている。それはシュライエルマッハーの宗教的人間学における、勝れて超越的なもの、すなわち高次の实在主義がもつ意義と必然性を明らかにすることに外ならない。²⁹ E・フックス、E・フリーバー、G・ウオツバーミン、J・ヴェントラントの諸研究を更に深めると共に、W・バルテルハイマーの、単にシュライエルマッハーの客観主義を強調する、一面性を是正せんとするのが、著者の意図したところであると述べられている。

石井氏の著書は、シュライエルマッハー神学の中心点を、信仰論にもとづいて明らかにしようとした点で、今日あらためてその貢献が認められてよいと思われる。戦後における研究の進展を見るに先立って、我々がこのような先駆的な業績を記憶することの意味は、決して少なくないであろう。

四 戦後のシュライエルマッハー研究の歩み

戦後約四〇年にわたる、日本のシュライエルマッハー研究の諸業績を述べるにあたって、我々は先ずここで、これまで取ってきた論述の仕方に若干の変更を加えなければならない。すなわち研究史のうえに記憶されるべき貢献をのこした、単行本に留意しつつ叙述するところから、さらに少なからぬ数の雑誌論文にも視野を拡大することになるのである。戦後には単行本よりも、主として学術的な雑誌論文を通して、シュライエルマッハーの思想が研究され、議論されてきたことは、すでに興味ある事実を提供していると云えよう。本論文の末尾におかれた付属資料には、著者が見出し得た限りの雑誌論文すべてを収録しておいた。その際に主として、国立国会図書館発行の「雑誌記事索引、人文・社会篇」(一九四八年以降)にもとづいていることを申し述べたく思う。

また日本における研究史がまとめられるのも、戦後に始めて見られる特長である。佐藤敏夫「日本におけるシュライエルマッハー研究」(一九六四年)および高森昭「日本におけるシュライエルマッハー文献」(独文、一九七六年)の二つを、この関連であげることが出来る。³⁰ いずれも研究史の叙述でありつつ、我が国におけるシュライエルマッハー研究が、ひとつの新しい展開を示す時期になっているという、問題意識をもっている特色がある。

戦後の業績を述べるに際して、先ず我々はシュライエルマッハーの著作の翻訳に言及する必要がある。その理由は、さきに戦前における業績を回顧して述べた際に、翻訳に関して指摘しておいた事柄と比較する時に、明白となるのである。すなわち戦前においては、シュライエルマッハーの初期著作の翻訳が、主としてなされていたのに対して、戦後には次第にその主要著作のうちで、日本語で読めるものが増加してきたことが目立つのである。とりわけ教育学、神学関係の著作が翻訳され出版された例が比較的多く、この意味で注目されて良いと思われる。もちろん初期著作のうち二、三の翻訳が、戦後はやい時期に出版されていることは、先に叙述した所ですでに明らかである。それらを考慮に入れてもなお、戦後になされてきた翻訳の範囲は、徐々にではあるが、シュライエルマッハーの主要著作に及びつつあると云えるのである。

シュライエルマッハーの教育学講義が、すでに戦前の諸研究において取り上げられていたのはもちろんであるが、翻訳として戦後に表われたのは、梅根悟・梅根栄一訳(一九六一年)³¹を先ずあげねばならない。これは大学論と教育学序説とを訳したものである。つづいて長井和雄・西村皓訳の「教育学講義」(一九六六年)が出版されていることを、我々は記憶する必要がある。³²

またこの機会にシュライエルマッハーの解釈学が、あらたに翻訳されていることを付け加えたい。久野昭・天野雅

郎訳の「解釈学の構想」(一九八四年)は、初期の作品にぞくする箴言集・第一草稿の二篇を訳したものである。¹³¹ つづいて神学関係では、我々は何よりも加藤常昭訳の「神学通論」(一九六二年)を逸することが出来ない。¹³⁴ シュライエルマッハーの円熟期における神学書のひとつが、翻訳されたことの意味は大きいと云わざるを得ないからである。さらに信仰論も抄訳ではあるが、今井晋訳(一九七四年)があらたに加えられた。¹³⁵ 序論の主要部分のほかに、キリストの人格を論じたパラグラフが訳されている。この訳とならんで、深見茂訳の説教六篇(一九七四年)が収録されており、目を通すことが出来るようになったのは幸いなことである。

我々はここで、戦後に発表されたシュライエルマッハー研究の業績の中で、主として雑誌論文に集中しつつ重要と考えられるものに言及したいと思う。紙数の関係で己むを得ず重点的に叙述せざるを得なかったことには、読者諸賢の御了解を願うと共に、末尾の付属資料にのせられた研究書および雑誌論文一覧を御参照ねがいたい。

教育学関係では以下の諸論文をあげることが出来るであろう。すなわち、

竹岡幸一「Schleiermacherの世界観について」(一九五六年)、「教育の自由について——Schleiermacherの見解を中心として」(一九五七年)、「教育目的についてのSchleiermacherの見解」(一九七四年)。¹³⁶

武安有「シュライエルマッヘルの支持的展開的教育作用について——彼の教育目標との関連において」(一九六六年)、「シュライエルマッヘルの公教育論——一般民衆教育論を中心として」(一九七八年)、「シュライエルマッヘルの道徳教育論」(一九八一年)。¹³⁷

またこの機会に文学関係で次の論文に言及しておきたい。

安田一郎「ロマン主義発端のころ——Fr. SchlegelとSchleiermacher——」(一九六〇年)、「Schleiermacherの

「Lucinde」評」(一九六二年)。¹³⁸

次に哲学関係では以下の業績は逸することが出来ないと思われる。すなわち、

浜田与助「波多野宗教哲学とシュライエルマッヘル」(一九五二年)。¹³⁹

岩井義人「カントからシュライエルマッヘルへ」(一九六七年)、「絶対依存感情について」(一九六八年)、「宗教の本質——シュライエルマッヘルの宗教思想の研究」(一九七二年)。¹⁴⁰

さて戦後に発表された研究論文のなかで、その数も多く活況を見せているのが神学関係である。最後にその中から主なものを列挙したいと思う。

佐藤敏夫「シュライエルマッハー神学における経験と歴史」(一九六一年)。¹⁴¹ また佐藤氏はその「近代の神学」(一九六四年)、「キリスト教と近代文化・近代プロテスタント思想史」(一九六四年)において、シュライエルマッハーの神学や倫理学を論じている。

緒方純雄「シュライエルマッヘルの批判継承の立場について」(一九七四年)、「シュライエルマッヘル研究——インランドにおける受容の問題をめぐって——」(一九七九年)。¹⁴²

高森昭「弁証法神学におけるシュライエルマッハー解釈」(一九七四年)、「シュライエルマッハーにおける『神学と哲学』」(二)(三)(一九七六—一九八〇年)、「シュライエルマッハーの信仰論第一版および第二版について——その成立、構成、内容に関する考察」(一九八二年)。¹⁴³

水谷誠「石原謙における宗教と神秘主義——とくにシュライエルマッハーの『宗教論』をめぐって——」(一九八三年)、「シュライエルマッハー『宗教論』受容の一形態——デイルタイ・リッチュル、オットーと石原謙の対論及び翻訳

日本におけるシュライエルマッハー研究の七〇年(一九一四—一九八四)(高森)

五 回顧と展望

七〇年にわたる日本におけるシュライエルマツハー研究の成果を回顧し、今後の課題を吟味して、我々の展望を述べることとしたい。もちろん新しい研究が今後も続いて生み出されてくることを筆者は確信しているが、一九八四年の時点におけるひとつの総括をここに記したく思うのである。

日本におけるシュライエルマツハー研究の歴史から、我々は以下に述べる三点の特色を見出すことが可能ではないかと思う。まず第一にシュライエルマツハーの初期著作は、我が国においてはドイツの哲学、思想、文学の研究者によつて、早くから関心がはらわれてきたことである。これに対してその神学著作は、戦後の六〇年代から次第に研究者の間で取り上げられ始めたのであり、この対照は正に日本に特有の現象であると云えよう。しかし神学以外の領域でシュライエルマツハーの初期著作が読まれ訳されてきた状況は、決して悪しき事柄であったとは思われぬ。むしろ逆に広範な学際的視点をもつて、一九世紀思想史・文化史の中にシュライエルマツハーを位置づけし厳密な評価をなす場合には、よりふさわしい状況が早くから備わっていたものと解して差し支えないであろう。

第二にシュライエルマツハーの学問的な研究は、宗教哲学の關係者によつて地道な進展がとげられてきたことである。この点とはくに戦前の業績を回顧する時に見出されるところである。波多野精一、中村明両氏の名を逸することは出来ないと思われる。その「高次的實在論」の主張は、当時のシュライエルマツハー研究の学問的レベルを開拓するために、少なからぬ貢献をなしていることを、我々は忘れるべきではない。とくに一九二〇年代に弁証法神学が激

しいシュライエルマツハー批判を展開し、その影響が我が国においては「その批判を通じてのみシュライエルマツハーを知るといふ弊をまねく」ようになった時期に、このような周到な論述が行われていたことは、ながく研究史のうえで記憶されて然るべきことに違いない。

第三に日本におけるシュライエルマツハー研究が、神学の領域において展開を始めるのは、戦後のことである事実にもふれる必要がある。シュライエルマツハーの神学そのものを本格的に研究することは、それへの批判の試みとして登場した、弁証法神学の我が国における理解の仕方を更めて吟味する問題意識と、深いところまでつながっていると云える。この関連で我々は、石井次郎氏の努力を少なからず評価することが出来るのである。少なくともシュライエルマツハーのテキストに基づいて、弁証法神学者のシュライエルマツハー批判を修正しようといった点は、研究史のうえに覚えられてよいと思われるのである。さらに戦後の業績を全体的に見るときに、神学の領域において数多くの雑誌論文があらわれ、次第に緻密な研究が積み重ねられつつあることが、最後に言及されてよいであろう。こうした研究が求められ、またなされ得る条件が今ようやく整ってきていることを、この機会に記憶しておきたいと思うのである。

シュライエルマツハー研究は、その時代の思想の動きそのものに即して、もともと総合的・体系的、我々の言葉で云いかえるならば学際的なアプローチが強く求められているのである。この原点に立ち返って、日本におけるシュライエルマツハー研究の七〇年をふりかえるときに、我々はひとつの厳しい反省を迫られるのである。すでに個々の研究者による良心的かつ先駆的な成果が、幾つものこされているのを我々は見てきた。それらが必ずしも他の研究領域に刺戟を与え、批判を呼びおこして更に討論が展開するという形で継承されてきたとは、残念ながら云うことが出来ない。当時としては学際的な研究態勢は、望んでもかなう事ではなかったと云うべきであろうか。むしろそれは今後

の大切な課題として、シュライエルマツハー研究に従事する者すべてにとつて、胸中ふかく刻まれるべき教訓ではなからうか。

注

- (1) A. Takamori, Japanese Interpretation der Glaubenslehre im Jahre 1948 bei Ziro Ishii, なお本報告は「学会における講演・報告・討論をまとめた書物に収録されて、近く刊行される予定になっている。」
- (2) 研究史として以下のものを参照されたい。
佐藤敏夫、日本におけるシュライエルマツハー研究、日本の神学3、一九六四年、七八―八三頁。
A. Takamori, Schleiermacher-Literatur in Japan besonders in theologischer Sicht. Ein bibliographischer Forschungsbericht, Kwansai Gakuin University Annual Studies Vol. XXV, 1976, S. 1-18.
なお、歴史の神学シンポジウム、一九八四年、創文社、二二―二七頁には、「シュライエルマツハーとバルト」をめぐる討論に関連して、中川秀恭氏による研究史への言及があるので、併せて参照して頂ければ幸いである。
- (3) 高倉全集、第四卷、一九三六年、三七三―五〇頁に収録されている。これは日本神学社における卒業論文であり、宗教論の内容を概説したものである。
- (4) ちなみに、石原謙著作集、第一卷、一九七八年、岩波書店、二四七―二八七頁には、序および『宗教論』内容解説が収録されている。これらは一九三二年刊行の改訂第三版を底本にしている。
- (5) なお以下の論文が最近、発表されているので参照して頂きたい。
水谷誠、石原謙における宗教と神秘主義——とくにシュライエルマツハーの『宗教論』をめぐって、基督教研究、第四五卷第二号、一九八三年、二五―三六頁、および、シュライエルマツハー『宗教論』受容の一形態、——デイルタイ、リッチェル、オットーと石原謙の討論及び翻訳、基督教研究、第四六卷第一号、一九八四年、九三―一二頁。
- (6) 岩波講座「世界思潮」第七冊に収録。のちに、この文章は、キリスト教思想史、角川書店、一九四九年、二二―二四九頁に再び収録されている。また石原謙著作集、第七卷、一九七九年、岩波書店、三二―三四頁を参照されたい。
- (7) 下記のもの参照して頂きたい。
シュライエルマツハー宗教論、石原謙訳、内田老鶴圃、一九一四年、一九一九年(第二版)、一九二二年(改訂版)。

訂第下ね版)。

- シュライエルマツハー、宗教講話(世界大思想全集二〇に含まれる)、河面仙四郎訳、春秋社、一九二九年。
- シュライエルマツハー、宗教論、豊川昇訳、創元社、一九四八年。
- シュライエルマツハー、宗教論、仁戸田六三郎訳、コギト社、一九四八年。
- シュライエルマツハー、宗教論(岩波文庫)、佐野勝也・石井次郎訳、岩波書店、一九四九年。
- (8) 下記の翻訳を参照されたい。
シュライエルマツハー、独語録、木場了本訳、東亜堂書店、一九一五年。
シュライエルマツハー、独り想ふ、陶山務訳、大東出版社、一九三四年(一九三九年、一九四九年いずれも改訳)。
シュライエルマツハー、独白録(岩波文庫)、木場深定訳、岩波書店、一九四三年(なおシュライエルマツハー、独り語る、木場深定訳、理想社、一九八〇年をも参照して頂きたい)。
シュライエルマツハー、独語録、成瀬無極訳、北隆館、一九四九年。
シュライエルマツハー、独り想う、青春への贈り物(角川文庫)、秋山英夫訳、角川書店、一九六二年。
(9) 山極真衛、シュライエルマツハーの教育学、教育研究会、一九二八年。および篠原助市、シュライエルマツハー、大日本におけるシュライエルマツハー研究の七〇年(一九二四―一九八四)(高森
- 教育家文庫18、岩波書店、一九三九年(一九八四年復刻版)。
- (10) たとえば小池元、シュライエルマツハーと文化教育学、教育思潮研究第一巻第一輯、一九二七年、四―一五頁および石谷信保、シュライエルマツハーに於ける宗教教育の概念、同第一〇巻第一輯、一九三六年、三七―四九頁を参照されたい。
- (11) 渡辺泰三、シュライエルマツハー、西哲叢書19、弘文堂、一九三八年(一九三九年第二版、一九四八年第三版)。
- (12) 中村明、シュライアマツハーに於ける「高次的実在論」——「講演」の一考察——、石原謙編、哲学及び宗教と其歴史——波多野精一先生献呈論文集——、岩波書店、一九三八年、四一九―四四二頁。なお、同論文は、中村明、病床受洗、長崎書店、一九四二年、第二部に収録されているので、参照して頂きたい。また、波多野精一、宗教哲学(一九三五年)の巻頭に引用された「高次の実在主義」の主張を比較されたい(波多野精一全集、第四卷、岩波書店、一九六九年、八頁)。
- (13) 佐野勝也、宗教学概論、ロゴス社、一九三三年、五一―六頁および三七四―三七六頁(とくに三七五頁)を参照されたい。また同氏には「若きシュライエルマツハー」と題する論文(講座、大村書店、一九二五年、八九―一〇〇頁、のちにカントの宗教論、理想社出版部、一九二九年、二六三―二九二頁に収録)がある。
- (14) 大島豊、シュライエルマツハーの信仰論、第一書房、一

- 九三四年を参照されたい。
- (15) シュライエルマツヘル、世界大思想家選集4、第一書房、一九四〇年を参照していただきたい。
- (16) シュライエルマツヘル、信仰論序説、三枝義夫訳、長崎書店、一九四一年および石井次郎、シュライエルマツヘル研究——生涯と思想——、新教出版社、一九四八年。
- (17) 石井次郎、シュライエルマツヘル研究、二四三頁参照。
- (18) 前掲書、三一一〇頁を参照していただきたい。
- (19) 前掲書、二四四頁参照。
- (20) 前掲書、一〇一—二四一頁を参照して頂きたい。
- (21) 前掲書、一〇八—一二三頁参照。
- (22) 前掲書、一一三頁、また G. Wobermin, Art. "Schliermacher", RGG³ Bd. V, sp. 170-179を参照されたい。
- (23) 前掲書、一四八—一五八頁参照。
- (24) 前掲書、一五七頁より引用。また一八—二六頁、一三四—一五八頁を参照していただきたい。
- (25) 前掲書、一六八—一六九頁参照。
- (26) 前掲書、一九八—二〇〇頁参照。その際に K・ローゼンクラントのシュライエルマツハー批判が言及されている。また前掲書一九二—一九三頁を比較さへたい。
- (27) 前掲書、二一八頁参照。
- (28) 前掲書、二四〇—二四一頁参照。
- (29) 前掲書、二四三—二四四頁を参照されたい。
- (30) すでに注(2)にあげたものの外に、次の個所をも比較、参照していただきたい。
- 佐藤敏夫、近代キリスト教史、日本の神学(2)——その成果と展望——、一九六二年、八八—九五頁、とくに九三—九四頁。
- (31) シュライエルマツヘル、国家権力と教育——大学論、教育学講義序説——、梅根悟、梅根栄一訳、世界教育学選集一七、明治図書出版、一九六一年を参照されたい。
- (32) シュライエルマツヘル、教育学講義、長井和雄・西村皓訳、玉川大学版世界教育宝典二三、玉川大学出版部、一九六六年を参照して頂きたい。
- (33) シュライエルマツハー、解釈学の構想、久野昭・天野雅郎訳、以文社、一九八四年を参照されたい。
- (34) シュライエルマツハー、神学通論、加藤常昭訳、教文館、一九六二年を参照していただきたい。
- (35) シュライエルマツハー、キリスト教信仰(抄)、序論、キリストの人格について、今井晋訳、現代キリスト教思想叢書一、白水社、一九七四年、一二五—一九六頁に収録。また説教六篇、深見茂訳、七—二三頁をも参照されたい。
- (36) 竹岡幸一、Schliermacherの世界観について、研究紀要八(鹿児島大学教育学部、一九五六年)。教育の自由について——Schliermacherの見解を中心として——、研究紀要九、一九五七年。教育目的についての Schliermacherの見解、鹿児島大学教育学部研究紀要二五(人文、

- 社会科学篇)、一九七四年、一九七—二〇八頁参照。
- (37) 武安宥、シュライエルマツヘルの支持的展開的教育作用について——彼の教育目標との関連において、関西学院大学人文論究、一七—二、一九六六年、三三—五六頁。シュライエルマツヘルの公教育論——一般民衆教育論を中心に——、人文論究二七—二八号、一九七八年、一一—二二頁。シュライエルマツヘルの道徳教育論、関西学院大学人文研究三〇(四)、一九八一年、一一—二八頁参照。
- (38) 安田一郎、ロマン主義発端のころ——Fr. Sollegelと Schliermacher——、ドイツ文学二五、一九六〇年。Schliermacher S. Lucinde 評、ドイツ文学二九、一九六二年参照。
- (39) 浜田与助、波多野宗教哲学とシュライエルマツヘル、哲学研究三五卷八号、一九五二年、五二四—五三八頁参照。
- (40) 岩井義人、カントからシュライエルマツヘルへ、関西学院哲学研究年報八、一九六七年、三七—六七頁。絶対依存感情について、関西学院哲学研究年報九、一九六八年、三八—六六頁。宗教の本質——シュライエルマツヘルの宗教思想の研究——(関西学院大学文学博士学位論文)、一九七二年を参照して頂きたい。
- (41) 佐藤敏夫、シュライエルマツハー神学における経験と歴史、神学二一、一九六一年、一八—五九頁を参照されたい。また近代の神学、新教出版社、一九六四年、三六—七四頁(第一章、シュライエルマツハーにおける宗教概念と神学
- の再建)、および、キリスト教と近代文化・近代プロテスタント思想史、新教出版社、一九六四年、六五—七七頁(六、シュライエルマツハー)を比較していただきたい。
- (42) 緒方純雄、シュライエルマツヘルの批判継承の立場について、基督教研究第三九巻第一号、一九七四年、四六—六六頁。シュライエルマツヘル研究——イングランドにおける受容の問題をめぐって、基督教研究第四二巻第二号、一九七九年、六五—九五頁参照。また緒方氏の論文として、カール・バルトのシュライエルマツヘル論、基督教研究第二五巻第一号、一九五二年、五八—七一頁をも参照されたい。
- (43) 高森昭、弁証法神学におけるシュライエルマツハー解釈、神学研究二二、一九七四年、一〇八—一三三頁。シュライエルマツハーにおける「神学と哲学」(一)、神学研究二四、一九七六年、六四—八四頁。(二)神学研究二六、一九七八年、一一—三一頁。(三)神学研究二八、一九八〇年、八三—一一四頁。シュライエルマツハーの信仰論第一版および第二版について——その成立、構成、内容に関する考察、神学研究三〇、一九八二年、六七—九三頁を参照されたい。なお以下の論文を比較して頂きたい。リュッケケへの回覧書簡——シュライエルマツハー「信仰論」の研究と関連して——、神学研究三一、一九八二年、二三七—二五一頁、および、シュライエルマツハーとバルト、歴史の神学シンポジウム、創文社、一九八四年、一三六—一五〇頁。

日本におけるシュライエルマツハー研究の七〇年(一九一四—一九八四)(高森)

